



CLARITY

溪美居堂くまら

手伝いの女たちの泣き声で目が覚めた。

ハールはじっと天井を見つめ、それから毛布の中へもぐり込んだ。しっかりと目を閉じてみる。眠ってしまえば、違う目覚めがあるかもしれない。しかし、すでにすすり泣きながら階段を上がってくる音が聞こえた。毛布を握りしめた手がふるえる。

「くるな、くるな」

ハールは小さくつぶやいた。なぜ泣くんだと思いながらも、目が熱くなってきて、息が詰まった。

「ちがう、ちがう、絶対ちがう」

小声で呪文のようくり返しながら寝返りを打って、ハールはますます身を固く丸めた。その背中の向こうでドアが呪わしい音を立てて開かれ、

「若さま。お母さまが...」

アソルの妻フリッドの涙声が、起きてしまったことを告げた。

ハールは虚しく目を見開き、すぐに寝衣のそでで目もとをぬぐった。

「若さま...」

「わかった」

すばやく身を起こしてハールは答えた。その背中には6歳を迎えたばかりの幼さは微塵も感じられない。フリッドは痛まじさと敬意が入り混じった目でハールを見つめた。

「父上は中庭か。ぼくもすぐ降りる」

その声には、すでに涙の気配もなかった。

服を着替えたハールは階段を下りて中庭へ出た。

普段なら犬やあひるが足もとを駆け抜けていくのだが、今日は小屋へ閉じ込められたのか、遠くで鳴き声が聞こえるだけだった。積まれた藁の向こうに、うつむいたまま彫像のように立っている父アドールの姿があった。

「父上」

ハールは声がふるえないよう慎重に呼びかけた。アドールは夢から覚めたような顔つきで幼い息子をかえりみた。そして、

「フロージュンは...、そなたの母は天宮へ帰った」

父が子に話すというよりは、領主が民に何かを宣言するような調子で告げた。

人間たちのあいだには、人間は天の宮殿で失敗をして地上に降ろされたのだという神話がある。

「古き者」の末裔であるデウィンに比べ、何のちからも持たない人間たちの劣等感がにじむ神話だった。

この世で罪をつぐない、許された者は麗しい天宮へと帰る。去りゆく愛しい者たちのゆくえとして、これ以上のものはないだろう。

だが、フェルス紀元でも1500年以上の時を刻んだ人間は、情け深いデウィンに護られて無垢

な時を過ごしていた頃とは違っている。幼いハールの耳にも、その言葉はただの希望にしか聞こえなかった。

黙って立ちつくすハールの肩にアドールはそっと手を置いた。

もっとも泣きたい人間ふたりが、もっとも泣いてはならないのだった。

そのとき、ハールの弟フィニアンがフリッドに手を引かれて中庭に現れた。母と同じ、そしてハールともそっくりな薄青い目が涙でいっぱいになっている。まだ死が理解できる年齢ではないはずだが、悲劇が起きたこと、そして母が帰らないことを彼なりに感じとったのだろう。

「おいで」

かがみ込んだアドールはフィニアンを抱きしめた。厳格な父のいつにない態度に、フィニアンはかえって不安げに泣き出してしまったが、アドールは叱ることなくフィニアンの髪を撫でた。あと数年もすれば、フィニアンも泣くことは許されなくなる。ハールは弟の泣き顔を見ながらそう思った。

コル島は誇り高い者の住まう場所だった。そして、領主の嫡男である自分は、たとえフィニアンと同じ年齢であっても決して泣いてはならないのだ、とハールは承知していた。

フィニアンの声につられたかのように、帳（とぼり）の下りた窓の中から赤児の泣き声が響いてきた。アドールの顔の陰が深くなった。

半年前、妹トゥーリッドが喜びに満ちてこの世に生まれてきた時には、まさかこれほど早く母と別れることになるとは思っていなかった。ハールも、大人びた愁いに満ちた目で窓を見つめた。

広場の鐘楼の鐘が鳴り始めた。誰にもやさしかった奥方の逝去を告げる、悲しみの鐘だった。女たちの手で死出の装いをほどこされたフロージュンは、棺に納められ、アソルを始めとする一族の男たちに担がれて運び出されてきた。

アドールとハールが先導して墓地までの道を進む。道の脇には領民が集まり、悲しげな顔を伏せて哀悼を示した。ちょうど取引にきていたイェルズの男たちも、かぶり物を取って頭を垂れた。

「イェルズにも礼節はあると見える」

アドールが小さく言った。

「そうでしょうか」

まだ棺が通り過ぎないのに、もう列の向こうへ引っ込んだ連中を横目で見ながらハールは答えた。

100年余り前の戦争以来、コルと対岸の国イェルズの仲は険悪だった。それでもなぜかコルはイェルズの海運を必要とし、豊かな農産物の流通を彼らに任せている。

アドールは返事をしなかった。ハールも黙って歩いた。

沿道の女たちが白い花をふりまいた。

死者を送る天上の花ヴィータ、その白い花びらが青空に舞うと、夏の白く輝く日射しを思わせた。その白さがコルの明るく輝く日射しをなぞっているかのようだった。

見上げるハールは、いつか天宮で母に会う日がくるような気がしてきた。白いヴィータと白い日射しにくるまれて、いつの日か。

コルの太陽は明るい。

ドウニアの東海に浮かぶコル島は、太陽に愛された島と言われる。その陽光は島に豊かな恵みをもたらし、コルの農産物はドウニア全域で高く取引されていた。

おだやかに四季がめぐるコルのどの季節もうつくしいが、春爛漫の今は光と色がたわむれてでもいるかのようにすべてがやわらかく、それでいてあざやかに輝いている。

「兄さま、そこにいてよ」

トゥーリッドが叫んだ。父の手伝いに忙しいハールが幼い妹と遊んでやる時間はめったにない。フィニアンは女の子をばかにして相手にならないから、ハールが遊んでくれるとなるとトゥーリッドは大はしゃぎなのだった。

「わかってるよ」

返事をしたはずみに、黒髪に挿された花がこぼれ落ちた。小さな花が白く輝くのを見て、ハールはちらりと自分の手許を見た。彼の瞳の色によく似た、薄青いベリルの指輪が光をはじく。

フロージュンの葬儀のあと、アドールは領民たちの前で、この指輪をハールに譲ると宣言した。指輪は戦乱に追われて落ちのびてきたフェルス王の妹が携えてきたものといわれ、彼女が10代前の当主アルヴァルと結ばれて以来、代々の領主の妻が所有してきたものだった。

6歳のハールにはその意味がわからなかったが、それを息子に譲るということは、自分は二度と妻をめとらないというアドールの意思表示だったのである。

母の形見でもある指輪だけに普段は持ち歩かないのだが、トゥーリッドはこのベリルが大好きで、一緒に遊ぶ時にはいつも見せて欲しがった。母の顔も記憶にない妹の望みだと思うと、ハールはトゥーリッドの言葉に逆らえない。それに、陽光に透かしたベリルは、本当にフロージュンの瞳に似ていた。

「兄さま、どこ」

丈高い草むらごしに、摘んだ花を抱えてとことこ走り回るトゥーリッドの姿が見えた。彼女の背丈をしのぐ野草や灌木のせいで兄の位置がわからなくなっただけらしい。

「こっちだよ」

とハールは妹へ呼びかけた。髪に挿した花が落ちそうで立ち上がることはできなかった。

トゥーリッドは兄たちの髪を花で飾るのがお気に入りだが、その小さな手では上手く編み込めず浅く髪に挿しただけになって、彼らが身じろぎしようものなら落ちてしまう。フィニアンが妹と遊びたがらないのは、花飾りが恥ずかしい上におとなしく座っていなくてはならないためでもあった。

声がした方角がわからないらしく、トゥーリッドはきょろきょろしている。

「こっちだよ、おいで」

ハールが妹のほうへ気を取られたそのとき、空から彼の指輪めがけて影が舞い降りた。

「わっ」

一瞬、カラスかと思ったハールだったが、はるかに鋭い爪がとっさに閉じた彼の手の甲を切り裂

いた。大きな羽根がハールの頬をはたき、大鷹が丸い瞳でハールの目を覗き込んだ。

カラスなどは光るものを好み、時には人が身につけているものも狙う。しかし大鷹が人をめがけて舞い降りてくるとは思いもよらなかった。

「なんで、大鷹が...」

指輪を盗まれないようにこぶしを握りしめながら、ハールは思わず口に出して言った。大鷹の目はもの問いたげな色をたたえていて、話しかければ答えるのではないかと思われたからだった。しかし当然ながら大鷹は答えず、ふたたび首をかしげてハールの目をしばらく見つめたあと、また不意に飛び立っていった。

呆然と空高く舞い上がった大鷹を見上げるハールに向かって、

「あーっ、ひどい。せっかくきれいに挿したのに」

ようやく兄を見つけたトゥーリッドが大声で叫んだ。はっとしたハールがあたりを見ると、髪に飾られていた花がすべて落ちてしまっていた。

「ああ、ごめん。悪かったよ」

ハールはこっそり傷ついた手を覆い隠して、頬をふくらませる小さな妹に謝った。その頭上はるかに大鷹はくるりと円を描き、北へ向かって飛んでいった。

イエシリーは黄色い水晶をじっと見つめていた。

柱形に粗く削り出された表面にはいくつもの光の筋が走り、耳には聞こえない音が共鳴している。イエシリーの緑色の瞳が共鳴を追いかける。

早く、もっと早く。

やがてイエシリーは色のない空を翔（かけ）ていた。どこかに、速度を愛してやまない別の心が飛んでいるのを感じる。

早く、もっと早く。

放たれた矢のようにひたすら天翔るそれを追い抜き、姿を見てみたかった。そのとき、

「何か捉えたか」

素っ気ない声がイエシリーの集中を切った。

イエシリーははっと顔を上げた。見慣れた低い天井と淡い象牙色の石柱が目に入り、柱と同じ色の壁とそこに彫られた複雑な流水文様しか見えなくなった。銀の縫い取りに飾られた豪華なものでありながら、どこかなげやりに掛けられている瑠璃色の帳の前に、銀糸よりもうつくしい銀の髪を垂らした青年が立っている。

何の表情もない白い顔をみとめた緑の瞳に稲妻のような怒りの色が走った。

「いま、捕まえるところだった。ソルーシュがじゃましなければ」

「ほう」

ソルーシュと呼ばれた青年はイエシリーを見おろした。すらりと丈高い彼の足もとから睨みあげるイエシリーは5歳の少女だった。成長の心祝いに黄水晶を握らせたばかりである。それを使いこなすとは思えない。

ソルーシュの表情はうつくしいガラス細工のように微塵も動かなかった。しかし、イエシリーはどこからかソルーシュの疑いを読み取り、ふたたび瞳を閃かせた。

「からだが鋭くとがるほど早く飛んでたのよ。何かも一緒に飛んでた。わたしが勝てば見えたのに」

「そうか」

短くソルーシュは応じた。気乗り薄にも聞こえる声音だったが、イエシリーは表情をゆるめ、

「大丈夫、もう一度やってみる」

と彼を気遣うような言葉をかけた。

そのとき、

「やさしい、いい子じゃないの」

突然、扉のない出入り口から声がした。

はっとふり返ったソルーシュの面貌に、その秀麗さとはまったく別の何かがちらりと浮かんだ。

それを見抜いたように、

「あら、攻撃はごめんよ。あたしは<エイル>の水晶に呼ばれたんだから」

戸口からの声は続き、ほんのり桜色を刷いた白い豚が小さな目に笑いを浮かべて入ってきた。

幼稚な印象さえある歩きかたでとことこ歩きながら、その姿とはまったく異なる辛辣な口調で、
「何よ、この部屋には寝台もないの？ こどもをどこへ寝かせるのよ」
と豚はしゃべり散らした。部屋の中には刺繍されたいくつものクッションが置かれ、書物が数巻積まれているものの、他にこれといったものは見当たらない。ソルーシュの前で再度ひとわたり部屋を見回した豚は、小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「なるほど、これでいいと思っているのね。この子は人間らしい暮らしをするかもしれないのに、これではだめよ」

「お前は」

いったん言葉を切ったソルーシュは豚に顔を近づけ、声を低めて、

「お前は何を知っている」

豚を脅すようにささやいた。豚は意にも介さず鼻を鳴らし、

「何も。この子があの黄水晶をなぞり、昔の記憶を引き出したのなら、我が友リフィアの娘だろうと思うばかりよ。そしてリフィアの娘なら、父親は…」

すっとソルーシュが背を伸ばし、豚をにらみ下ろした。鎌首をもたげて獲物を見おろす蛇そっくりだった。

「イエシリーには何も知らせていない。知らないほうがよいこともある。水晶の縁（えにし）ならば出て行けとは言わないが、口には気をつけろ」

「知らせたほうがいいこともありそうね」

豚はソルーシュをにらみ返した。その目の奥には古く危険なものがうごめいていた。

イエシリーはソルーシュしか知らずに育った。

彼女が知るはこの象牙色の部屋と、扉のない出入り口から出られる中庭だけだった。庭の四方には石造りの壁があり、アーチ型の門には青い扉がはまっている。黒と銀の金属でいかめしく装飾されてはいるものの、押せば開けられるのかもしれない。けれど、なんとなく、イエシリーはその扉を開いてみる気になれなかった。

それでもソルーシュの言葉の端々から、この壁の向こうの広い場所にはいろいろなものが存在することが察しられて、すべてのこどもが未知のものへの好奇心を持つとおり、イエシリーも、そんな何かに会ってみたいと思った。

ソルーシュに渡された黄水晶を握りしめたとき、イエシリーは自分が大きくひろがるのを感じた。光と音のない共鳴を追って水晶の中へすべり込みながら、成長した、未来のうちのひとつの姿で大空に放たれていた。ソルーシュの言葉に聞き入りながら、その言葉から想像するまだ見ぬものに心奪われる感じに似ていたが、それよりはるかに強烈な感覚だった。

イエシリーは解放に酔い、酔うほどに自分が速度とちからを増して強大なものになってゆく気がした。

行き会った見知らぬ何かも、その時の彼女にはいたずら心に似た好奇心をあふれさせただけだった。

だが、いきなり現れた「自分でもソルーシュでもない存在」はイエシリーを混乱させ、不意に彼

女を幼いこどもに戻してしまった。こどもの体にはるかに大きなものの疲労が押し寄せたようで、ぐったりとクッションに寄りかかったイエシリーの耳には、ふたりの会話もほとんど聞こえなかった。

けれども、豚が口にしたひとつの言葉が彼女の中の何かに引っかかった。

「娘ってなあに？」

にらみ合っていたソルーシュと豚がそろってこちらを見た。そして豚は鼻面にたっぷりのしわを作ってソルーシュを見上げ、

「何もかも知らなさすぎだわ。この子をどうするつもりなの。普通の言葉が理解できないんじゃないの、話もできないじゃないの」

それが癖でもあるのか、横柄な口調で言った。ソルーシュの白い頬にうっすらと血の色が昇るのを、イエシリーは不思議なものを見るような気持ちで見つめた。

ソルーシュが答えないので豚はうんざりしたように首をふり、イエシリーのほうへ向き直って、

「あたしはマニン。あんたのお母さんの友人よ。と言ってもわからないか」

と話しかけ、歌うような笑うような調子で鼻を鳴らした。

「そうそう、さっき言った飛んでるものだけど。もうじき来ると思うわよ。天気が悪くて遅れてるみたいね」

「天気？」

小首をかしげるイエシリーに豚の目がさらに細くなった。

「ちょいと、ついといで」

マニンは巨大なからだを持ち上げ、出入り口へ向かってとことこ歩き出した。イエシリーはとまどってソルーシュを見上げたが、彼は反応を見せなかった。マニンは戸口で待っている。イエシリーは立ち上がり、豚と一緒に表へ出た。

中庭には多くの植物が植わっている。貴重な薬草もあった。しかし、あるべき庭園の美とはどこか異なる、乱調とでも言いたいようなおかしい庭だった。マニンは不機嫌そうに庭を横切り、自分が入ってきた門へイエシリーを導いた。

「わあ...」

マニンが押し開けた門の外は果てしなくひろがる水面、イエシリーが初めて見る「海」だった。彼女の住まいは海に浮かんでいたのである。

イエシリーは黙って海を見つめた。どれもこれも、何と呼べばよいのかすらわからなかったからだった。

そして、実は誰であっても言葉を失い呆然とするような光景がそこにはあった。おだやかに光とたわむれる波は門の外100ヤール（約31メートル）ほどまでで、その先は唐突に荒れ狂う波がぶつかりあっている。北方の青灰色の空ながら陽光に満ちた空も同じくいきなり途切れ、鈍色の雲がちぎれてはのたうつ嵐の空に変わっているのだった。

「これが天気。いいのと悪いのと、両方だね。あんたは護られているんだよ」

マニンの言葉の意味を尋ねようとしたとき、ずぶ濡れの大きな鳥がよろよろとおだやかな空の下へ飛び出してきた。マニンが大きく鼻を鳴らした。鳥は半ば墜落するようにイエシリーの肩先へ

降りてきたが、上手く掴まれなかった足の鋭い爪がイエシリーの肌を浅く裂いた。

「ヒューギン、気をつけなよ。この子の同居人はうるさいからね」

マニンが手厳しく言った。イエシリーはヒューギンも応えてしゃべるのだろうかと思ったが、大鷹は話せないようだった。そのかわり、彼はイエシリーの目を覗き込んだ。

イエシリーの目に、色と光がたわむれるうつくしい草原が映った。ここに降り注ぐよりもはるかに明るく、白く透き通る陽光、色とりどりの花々。そして、薄青い輝く宝石、いや、何かの、誰かの瞳。

夢見るように開いたイエシリーのとてのひらに、大鷹はくわえてきた白い小さな花をそっと載せた

。

ー デウインが「古紀」と呼ぶ太古、世には不思議なちからを持つ「古き者」が多くいた。我ら人間と同じ姿のもの、獣に似た姿のもの、龍や一角獣の類、人魚や半馬人のような不可思議な姿を持つもの、さらに形を持たぬもの、姿をとどめぬものもいた。

それら「古き者」のありようを思いめぐらすことができようか！ 彼らを窺い知ることもならぬ人間など、部屋の片隅に這う虫に等しかった。

弱き者を慈しむ者と蔑む者が現れるのは世の習い。ここドゥニアでは人間をめぐって「古き者」デウイン族とジアルデル族の争いが起こった。

情け深きデウイン！

詩人はいまでもこう唱（うた）い讃える。対してジアルデルは身内のちから劣る者さえ嫌い、ましてや人間など、目ざわりな虫と同様、取り除くべきだと考えた。

やがて争いは激しくなり、人間には想像も及ばぬ大きな戦争に至った。

デウインの暦では古紀2050年、恐るべきかな、海が干され大地が沈む戦がおこなわれたのだ！

はるか昔、「誰も語れぬ地」へ去ったという「さらに古き者」の最後の戦いにも匹敵する、恐ろしいものだったと、デウイン自らがのちに歌ったらしい。デウインの末裔たる「塔の賢者」ジルニトルの書庫に歌詞のみが残されている。

デウインに幸あれ！ 敗れたジアルデルはこの地を追われた。

ジアルデルの故地は無慈悲な彼らにふさわしく戦で破壊しつくされ、やがて戻ってきた海水に沈んだ。イェルズと、あの不思議な島コルのあいだの海こそジアルデルの故地であり、海底に彼らのちからの粹を集めた祠アンファルオルが残っている、と言い伝えられている。ー

「どうもオルバンの書いたものは好きになれないね。わざとらしいったらありゃしない」
イェシリーと一緒に書物を覗き込んでいたマニンが大きな鼻にたっぷりしわを寄せた。

「オルバンって？」

「これを書いた者の名だよ。フェルスの大学でふんぞり返っていたじいさま。もう、ずいぶん前に天宮へ帰ったみたいだけど」

「フェルスって？ 大学ってなに？」

イェシリーの矢継ぎ早な質問に目を細めたマニンのうしろから、

「相変わらずよけいな舌を叩いているな」

ソルーシュが言葉をはさんだ。言葉つきは憎々しいが、淡々と事実を述べているといった口調だった。そしてマニンの反応を待たず、

「練習だ」

と、イェシリーに長い鞭を渡した。鞭は非常に固い金属片のようなものをつなげて作られていて、うろこを光らせて身をくねらす蛇に似ている。

イエシリーは情けない顔になったが、逆らうことなく立ち上がった。逆らったところで無駄に決まっただけで、現に、ソルーシュはいかにも当然とばかり先に中庭へと出て行ってしまった。マニンとヒューギンが現れて以来、庭を囲む壁の扉は開かれている。マニンの強い意志だったが、見えるものは常におだやかな海面だけだった。館を載せた浮島は決して陸地に近寄らず、人間の船団をも避けて、魚のほかは何もない海をただようばかりなのである。

中庭の中央には小さな泉水があり、湧き出す澄んだ水が初夏の陽光にきらめいていた。井戸として使っているものだが、精緻な文様を刻まれた噴水口は装飾として眺めても面白味がある。

ソルーシュはその脇に立ち、すらりと細身の剣を抜いた。

「来い」

短い言葉を合図に、イエシリーは渡された鞭をソルーシュめがけて打ち込もうとした。しかし、ごつい鞭は彼女には長すぎ、また重すぎた。小さなからだだがむしろ鞭の動きに振り回され、イエシリーは転びそうになった。はずみで鞭が当たった花壇の石組みが砕けた。

ソルーシュは眉ひとつ動かさず、イエシリーが体勢を立て直して打ち込んでくるのを待っている。イエシリーは鞭を思いきり振った。制御できない鞭の先が思ったよりも伸びて、ソルーシュの顔に飛んでいった。はっと身を固めたイエシリーは、軽く剣でなぎ払われた鞭の反動で吹っ飛ばされ、葉草畑に倒れ込んでしまった。

仮面のようなソルーシュの顔つきが変わった。しかし彼が駆け寄る前に、鞭を投げ出したイエシリーが思いきり叫んだ。

「ソルーシュなんか、大嫌い！」

わあわあ泣きながら部屋へ引っ込んでしまったイエシリーと入れ替わりに、マニンが出てきて、彫像さながらに突っ立っているソルーシュへ声をかけた。

「お気の毒さま。まあ、こどもの言うことを真に受けるんじゃないよ」

ソルーシュの眉間に深いしわが現れた。マニンはそれを面白そうに見上げ、

「こういう思いやりを理解するにはまだ小さいよ、あの子は」

訳知り顔で言うと、太い首を器用に動かして砕けた石組みのほうをふり返った。

「あの子の力でこれとは、ひどいもんだね。龍のうろこかい？」

「ああ」

イエシリーが投げ出していった鞭にマニンは鼻先を近づけた。龍のうろこはこの世で一番固いと言われている。それを連ねた鞭ならば、石を砕きもするだろう。

「それで…」

いったん言葉を切って、マニンは顔を上げた。

「いつ話すつもりさ。あの子自身のことを」

ソルーシュは露骨に顔をしかめた。彼はどうやらマニンが苦手なようで、マニンと話す時だけは表情がはっきり豊かになる。

「必要ない。あれは豚と鷹と人を隔てることも知らぬ。そのままがいい」

「何を言ってるの」

マニンは盛大に鼻を鳴らした。

「オルバンの書をすらすら読むかと思えば、海の意味すらわかってない。あの子はめちゃくちゃなんだよ。世間と関わった時に…」

「関わることはない。人の世には」

ソルーシュは、まっすぐマニンを見おろして言い切った。その琥珀色の瞳の中心がずっと細くなったように見えた。

長く諸国を渡り歩いたマニンはいろいろな場所で天宮を描いた絵画や刺繍、工芸品を見ている。人間たちは、天宮には罪にまみれなかった「無垢なる者」がいて、その姿も心根も夢のようなものだと思い、技量の限りの美をその似姿に与えてきた。

ソルーシュの容貌はそれらの姿を思い出させるけれども、その人離れした恐ろしさを秘めた目を見れば、彼が夢の対象でないことが誰にもすぐわかるだろう、とマニンは思った。

恐れを知らない豚は皮肉っぽく目を細め、

「母方の血を甘くみないことだね。あの子は＜エイル＞の子でもある。情け深きデウインの中でも、もっとも弱き者を放っておけない＜癒やし手＞のね」

さりげなく、しかしソルーシュの言葉を押しひしぐ強さで言った。

磨き上げられた剣が初夏の陽をはじいた。

陽光よりも軽く、フィニアンはアヴァラルの剣にはじかれている。アソルの弟で領主の家系の傍流に当たるアヴァラルはコルでも一、二を争う猛者である。わずか7歳のフィニアンなど敵うはずもないのだが、そこはこどもで、フィニアンは本気でくやしがり、むきになって斬りかかっていた。

ちょうどそこへ、港から帰った父を迎えようと館から出てきたハールをみとめて、

「若、剣が錆びておりませんか」

アヴァラルが胴間声を張り上げた。

自らが武張っているだけに、アヴァラルは領主のふたりの息子がすぐれた武人として育つことを望んでいる。父について領主の道を学び、＜グータ＞すなわち学識者シュラルのもとで学問を修めているハールに向かい、まるで怠けていたかのような物言いをするのも熱意のためで、ハールも表庭へ入ってきたアドールも一様に苦笑いを浮かべた。

「父上」

許可を求めるように声をかけたハールへ、アドールはゆっくり頷いた。息子の成長ぶりを見てみたくもあったのだろう。

父と入れ替わりに石段を降りたハールはアヴァラルへ一礼した。コルでは領主の権威は絶対で、嫡男であるハールは11歳の少年ながら誰からも敬意をもって接されている。だからこそ、年長者への礼儀は決して欠いてはならないのである。

コルの特徴である幅広の両刃の剣を抜くと、ハールはアヴァラルに向かっていった。一撃、二撃は合わせたか、三の切っ先がふいに伸びてアヴァラルの剣をかくぐりかけた。アヴァラルの目の色が変わった。数合切り結んだのち、つい力が入りすぎたアヴァラルの剣がハールの剣を叩き落とし、はずみでハールも転んだ。

「失礼」

少しあわてたようすでアヴァラルはハールを助け起こそうとしたが、誇り高い少年はそれを拒んで起き上がり、一礼して剣を収めた。

目を輝かせたフィニアンが兄に駆け寄って、

「兄上はすごいや。もし戦が起きたら、ぼくはハーコンのスコルみたいになりそうだ」

無邪気に言ったのを聞きとがめ、

「スコルになりたくなければ練習あるのみ。フィニアンさま、続きを」

いくらかばつが悪かったらしいアヴァラルが怒鳴った。フィニアンは首をすくめて剣を構え直す。ハールはふたりを庭に残し、父と一緒に館へ入った。

執務室の大きな椅子に腰をおろしたアドールへ、留守中に領民から預かった書類を渡しながら、

「ハーコンといえば…」

ハールはふと思い出したことを口にした。

「さきほど使いに来たハンジールが言うには、北部では大規模な開墾を進めているそうです」

「ハンジールというと、バインデルの息子か。あの家はハーコンにもっとも近いな」

「こどもの言うことなので、はっきりはしませんが」

ハールの口から続いた言葉に、アドールの目の奥でかすかな笑いがさざめいた。ハールと北寄りの農場の息子ハンジールは3歳ほどの違いしかない。

だが、ハールの誇りを傷つけないよう、笑いはすぐに消えた。領主の嫡男がくり返してきた道に沿って、年端のいかない息子がいかに無理を重ねているか、アドールは痛いほど理解している。ハールは父の胸中には気づかず、

「どうも北へと切り拓いているようなのです」

もっとも懸念すべき言葉を口にした。アドールの眉間に深いしわが現れた。

「バインデルが見たのか」

「いいえ」

ハールはどっしりした机に寄りかかり、大人のように眉をひそめて、

「ギンナルの代になってから、ハーコンとアルドリドのあいだに見張りがひそむようになったそうですが、それが近頃では堂々と道に現れ、領民の行き来すらとがめるようになったとか」

ハンジールのお話を整理して伝えた。不機嫌な顔つきでアドールはしばし考えたが、

「ハーコンといえど、状況がはっきりせぬうちに叱責するわけにはいかない。目に余るようならば、ギンナルをここへ呼んで申し開きをさせよう」

と結論をつけ、ちょうど部屋へ飲み物を運んできたフリッドからビールを受け取りながら、

「まったく、ヴェストルもよけいなことをしたものだ。出来の悪い弟をあわれむのはいいが、北部に土地を割いてやるとは」

めずらしく愚痴をこぼした。

「殿さま、ご先祖の悪口をおっしゃるものじゃありません」

フリッドがびしゃりと言った。フロージュン亡き後、この家の家事も一手に引き受けているフリッドは、夫アソル同様あくまで臣下としての態度は崩さないが、家を束ねる婦人の貫禄がついている。おとなしく彼女が扉を閉めて去るのを待ってから、

「アルドリドの当主なら、一度ならず思うことだ。ヴェストルがスコルを北方で野放しにしなければ、とな」

ビールの杯を傾けながらアドールは話を続けた。

100年余り前のイェルズとの戦の時、当主の弟スコルは戦場で致命的な失態を演じた。

戦後、兄に責められると思ひ込んで逆上したスコルは、いっそ兄ヴェストルを殺そうと考え、戦勝の宴の席に乗り込んだが、あとさきを考えない襲撃はむろん失敗し、母の助けでなんとか北の荒れ地へ逃れたのみに終わった。

愚かに過ぎる弟への憐れみと、母の嘆きに抗いかねて、ヴェストルはそのまま北方の土地を弟に割譲してやった。以来、直系の家名アルドリドに対し、スコルの子孫は土地の名をとってハーコンと名乗るようになったのだった。

ハーコン一族はもっと聞こえのいい話をでっちあげて吹聴しているが、島の者は誰もがこの話をよく承知していたし、アルドリドの子であるハールやフィニアンはまして遠慮なく口にしてはばからない。こどもたちの傲慢に対して厳しい眼を向ける父やアソル夫妻も、ハーコンの話となると何も言わないのが常だった。

それどころか、

「なにしろ、スコルよりましな当主が出たためしがない、ときている」

とアドールは辛辣なことを言った。ハールは小さく含み笑いをした。

「フリッドに言わせると、現当主ギンナルは中でも最悪だとか」

「ああ、あれはわしより年下だからな。長生きされるとそなたも苦労するぞ」

アドールがめずらしく軽口で応じた。イェルズとの交易が上手くいっているらしい、とハールは察しをつけた。ここ2年ほど、妙にイェルズのものわかりがいい。2年という期間がハールの頭のどこかに響きかけたが、

「いかにギンナルといえども、山の下に手出しはしないだろうが」

という父の言葉で会話に引き戻された。アドールの眉間にはふたたび険しいしわが刻まれている。

ハールは小首をかしげ、

「北を気になさるのは、ハーコンがフレニン山の山肌を荒らすためかと思っていましたが」と訊ねてみた。フレニン山は島の北部にあり、低山ながらこれが風よけになって北からの海風をやわらげている。農業国であるコルにしてみれば、失うわけにはいかない天然の防壁だった。

「山肌の樹木も大切だが...」

言いさして、アドールは言葉を切った。息子の顔を初めて見るもののようにまじまじと見つめてから、アドールは視線を外し、

「いずれ、そなたが領国を支配するようになった時にはわかる。なぜ北部が大事なのか。そもそも、我らアルドリドがここにいるのはなにゆえか」

アルドリドの当主が重ねてきた数百年の時に思い馳せるかのようにゆっくりと言った。

一ミーラントの悲劇を語る上で重要なのは、デウィンのことだろう。ジアルデルを追い落としたのち、彼らの中にジアルデル的な何かが生まれたようにも思われる。

もちろん、オルバン教授の主張するように、か弱い人間をスニルベオル山脈の南に置いてやり、自分たちのみで荒れ果てたドウニアを回復しようとしたことは彼らの善良さを表しているであろう。

しかし、彼らとて何もかもを石のひと撫で、呪文のひとことだけで変えられるものではない。アルフリクの理念をよそに、あわれな生き物同様の「手を使う」作業に嫌気が差す者が現れるのは時間の問題だった。むしろ不思議のわざへの思いが強くなったことで、ジアルデル同様、そのちからを存在の証明とし、劣ることを嫌うようになったと思われる。

そしてイメア輝石をめぐる騒動が起きるのである。一

イエシリーはいつものようにマニンと書物を読んでいた。

しかしその書物は、1年近くソルーシュと嫌味の応酬をした末、マニンが勝ち取った目新しいものだった。聞き慣れない言葉がたくさんある。頭の中を疑問符でいっぱいにしたイエシリーが口を開きかけた時、突然、部屋が激しく揺らいた。

マニンの意見で置かれた机や椅子がなぎ倒され、小さな天幕付きの寝台までが床をすべる。寝台の脇に置かれた止まり木にいたヒューギンはあわてて飛び立ち、なんとか押しつぶされずに済んだ。イエシリーは豚の豊かな腹に半ば埋まって、彼女と一緒に壁まで吹っ飛んでいった。ふたりは瑠璃色の帳に突っ込み、はずみで外れた帳にくるまれたまま、今度は反対側の壁へ向かってすべった。

「何なの、いったい！」

マニンが怒声を張り上げるや否や、部屋は傾いたまま静止した。

たっぴりした布地から這い出たマニンはイエシリーの首根っこをくわえて引きずり出し、天井近くをばたばた飛び回っているヒューギンを睨みつけたあと、中庭へ向かった。

傾いた床に難渋し、イエシリーが這うようにしてあとに続くと、中庭には見たこともない光景がひろがっていた。開かれた扉からは白い牙を剥く波が押し寄せ、貴重な植物を海水が洗っている。凝然と立ちつくすソルーシュの足も流れ込む海水に浸っていた。

「何が起きたのよ」

マニンの声にふり返ったソルーシュの顔は、イエシリーのまったく知らないものだった。

マニンが鼻を鳴らした。

「真っ青だね。うろたえて目も虚ろってわけ。日頃のえらそうな顔はどうしたのさ」

呆然としていたソルーシュの面貌にはっきり怒りが表れた。その顔を翳らせて、何かが空を横切っていく。

イエシリーはとっさに上空を見上げた。おだやかな青空が天蓋のようにいつもあったそこには、さまざまな濃さの雲が渦巻いていて、わずかな陽光と稲妻をかすめて細長いものがのたうって

いた。

「龍...」

絵入りの書物で見たのと同じ姿だとイエシリーは思った。しかし、人間の筆になるものよりはるかに恐ろしく、ちから強く、うつくしかった。

龍は数頭いるようだった。黒光りするもの、翡翠のようなもの、雲間に見え隠れする姿を魅入られたように見つめていたイエシリーは、ソルーシュに腕をつかまれて引きずられた。

「痛い、何なの、ソルーシュ」

「いいから、館の中へ戻れ。姿をさらすな」

イエシリーの緑の瞳に怒りの炎が走った。彼女はソルーシュの腕をちからづくでふりはらい、驚きの色を浮かべた白い顔を睨み上げた。

「いつまでも抑えてはおけないよ。それより、あの龍たちは互いに争ってるようだ。目に入らないうちに逃げたらどうだい」

マニンが口をはさんだ。ふり返ったソルーシュは水かさが2ソルミ（約5センチ）も増えるほどのあいだ、たっぷりと豚の顔を睨みつけたあと、イエシリーの顔を見ないまま、門扉に向かって海水の中へ踏み込んでいった。

その姿はすぐに輪郭を失い、銀色がかった霧となってほぐれながら水中へと沈んだ。波間で銀色の影は大木のような太さになり、光沢を持つ肌膚がうねうねと伸び、やがて琥珀色の眼をした一匹の水蛇が門扉からすべり出ていった。目を丸くして見送るイエシリーに向かい、

「恐ろしいかい」

マニンが訊ねた。イエシリーは激しく頭をふった。その頬は薔薇色に染まっている。

「ソルーシュ、きれい...」

「そう言うと思ったよ。龍にも見とれていたのでね」

イエシリーはふたたび空を見上げた。さきほどは真上にいた龍たちがやや東方に移動している。彼らが動いただけではなく、館を載せた浮島そのものがソルーシュに運ばれて西へ進んでいるのだった。

龍たちは相変わらず硬質の輝きを放ちながら飛び交い、ぶつかり合っているようだった。時折、鋭い牙や爪がきらめき、特に蒼（あおぐろ）い一頭が攻撃され、追いつめられているように見える。

イエシリーのからだの中で、今まで知らなかった血がたぎり始めた。自分もソルーシュのように、人のからだを解いて空中に舞うものたちに似た姿になるのではないか。イエシリーは脈打つてのひらを広げ、手を広げ、胸を反らしてみた。しかし、彼女は大きくもならず、姿が変わりもしなかった。

急に、龍たちがからまり合いながら空をすべるようにこちらへ向かってきた。とっさにマニンが巨大なからだをイエシリーにぶつけた。突き飛ばされたイエシリーがいた場所に、龍のうろこの破片とおぼしきものが落下して石畳に突き刺さる。

「館へお入り！」

マニンの大声にかぶさって、龍たちが海に墜落したすさまじい音がした。浮島も動揺し、庭を囲

む壁を越えて波しぶきが庭へ降り注いだ。さすがにイエシリーも館へ駆け込み、続いて飛び込んだマニンと一緒に傾いた床で転がった。またぞろ帳に突っ込んだマニンは盛大に鼻を鳴らし、何やらつぶやくと斜めに静止した部屋を元どおりにしたが、ソルーシュが大きく方向転換したらしく、結局ふたりはまた帳の中へ倒れ込んだ。

「これから、この帳を見るたびに腹が立ちそうだ」

マニンがぶつぶつ言った。

しばらくすると浮島におだやかさが戻ってきた。ヒューギンがひっくり返った椅子の脚に舞い降りるのを見て、マニンは庭へ向かい、イエシリーもついていった。

浮島の上の空はいつもの青空に戻り、あたりの海も静かになっている。海水に荒らされた庭を横切り、イエシリーは門扉のあたりまで出てみた。いつものように、100ヤール先にはまだ鎮まりきらない海が波立っている。しかしすでに龍たちの姿はなかった。

「けがはないか」

聞き慣れた声にはっとふり向くと、ソルーシュがいつのまにか庭に戻っていた。

「うん。ソルーシュは大丈夫？」

目でうなづいたソルーシュの足もとから、

「やれやれ、あたしやヒューギンの心配はなしかい？ まあ、水蛇じゃあ、まだまだお子さまだ。礼儀を知らないのも無理はないね」

憎まれ口を叩きながら、とことこマニンが門扉まで歩いてきた。

「あいかわらず、おかしな眺めなこと。だけど、あんなことの後じゃあ、ありがたいね」

マニンが笑うように鼻を鳴らした時、遠い海にぼんやりとした光が射した。

「あれ、何だろう」

イエシリーが指さした光は海中から空に向かって放たれているようだった。青、瑠璃、薄紫、若草色、色をさまざまに変え、強くなったり弱くなったりしながらひろがっていく。ソルーシュが応えないのでマニンに訊ねようとしたイエシリーは、彼女のようすがおかしいのに気づいた。

「マニン？」

呼びかけにも応えず、豚はふるえている。イエシリーの目にも、マニンのやわらかな体毛が総毛立っているのがわかった。

荒い息を吐き、後じさりするマニンのようすにソルーシュも気づき、

「どうした。うろたえているのか」

皮肉な口調で言ったが、マニンには応じる余裕がないようだった。ソルーシュが眉をひそめた。豚の正体を完全に把握しているわけではないが、尊大な態度に見合ったちからの持ち主であることは理解している。

「何だ、言え」

ソルーシュの声音に真剣味が加わった。彼を見上げたマニンの顔にはありありと混乱が現れていて、妙に人間めいて見えた。

「逃げよう、早く。ここにいちゃだめ」

うわずった声はマニンとも思えない。もう一度、遠くからひろがってきつつある光を見つめる

ソルーシュの顔をイエシリーは不安げに見上げた。

ソルーシュの表情はほとんど変化しないが、ずっと彼と一緒に暮らしているイエシリーには読み取ることができる。彼にも、何かしら不穏なものがあったわってきたようだった。そしてそれは、イエシリー自身の感覚にも遠雷のように響いていた。

ソルーシュは素早く海中に飛び込み、ふたたび姿を変えた。心細さに冷たくなった手でマニンの背を撫でながらも、イエシリーは波間を走る銀の影をつくづく美しいと思った。

「館に入ろう」

言葉が終わらないうちにマニンが小走りに中庭へ入っていった。あとに続こうとしたイエシリーは、ふと光の方をふり返った。

「あっ」

さきほどの蒼い龍が光の中にいた。光に絡みつかれ、もがいているように見える。

マニンを呼ぼうと一瞬だけ庭のほうを見て、イエシリーが目を戻した時には龍の姿はかき消えていた。見間違いかとも思えるが、ひろがる光は不気味さを増したような気がする。イエシリーは恐ろしくなり、マニンの後を追って中庭を駆け抜けた。

道の脇の果樹が若葉をつけ、さわやかな風に揺れている。果樹畑のあいだを縫う道は白く輝いて、往く人の心を浮き立たせた。ハールもめずらしく、いくらかこどもじみた歩きかたになっている。

「若さま」

呼びかけられてどきりとしたハールだったが、相手の顔を見て破顔した。若木の精霊と見まごうようなほっそりした少年は、ハールの唯一の学友だった。

領主の嫡男は単独で〈グーダ〉から教えを受ける。それがコルのしきたりだが、ヴィトは今の〈グーダ〉シュラルの自慢の息子で、ハールのためにはなっても邪魔にはならないと誰もが考えた結果、ふたりは一緒に学ぶことになった。峻厳な芯を持つハールと圭角のない賢明さを持つヴィトは相性がよく、互いに深く信頼し合い、アドールがふたりのことを「善き一対」と呼んで喜んだほど仲が良かった。

「今から君の家へ行くところだった」

「父に御用ですか」

「タウルが歩いたんだ。先日の薬のおかげだろう」

ヴィトの顔にも喜びの光が射した。

タウルはアルドリドの傍流のひとりで、フロージュンがいた頃は領主家の家宰を務めていた。女主人が亡くなり、フリッドが家事を引き受けた際にフリッドの夫アソルと職務を交替し、イェルズとの取引を担当するようになった。そして三年前、イェルズからコルへ戻る途中で時季外れの嵐に遭い、難破して重傷を負ったのだった。

「もっと早く見つかったら、あれほどひどくはならなかっただろうが」

流されて発見が遅れ、状態がこじれたと言われていることをハールはそのまま口にしたが、

「そればかりではないかもしれません。あの時の嵐はなにゆえか、父にもいまだにわからないのです」

ヴィトは考え深げに言った。

〈グーダ〉の専門は天文であり暦法だが、知識人として教育や医療にも手を染め、天候にも造詣が深い。イェルズの船がめったに沈まないのは、コルの〈グーダ〉が天体や気象の知恵を授けているからだと言われている。

ふたりは果樹畑を抜け、シュラルの家を下るつづら折りの道を飛び跳ねるようにして降りた。

ヴィトとふたりでいる時だけは、ハールもただの14歳の少年だった。というよりむしろ、思慮分別はヴィトに任せ、わざと大胆さを選んでいるようなところがある。

「さっきの話だが」

大木の葉陰に家が見えたころ、ハールはふと思いで言った。

「タウルが言うには、船が沈む前に龍を見たという者がいたらしい」

「くだらん話ですな」

だみ声が答えた。驚いたハールが目をこらすと、大木の落とす影の中に人影がある。ごたごたし

た服装がその男の素性を語っていた。

「ギンナルの息子か」

ハールは高飛車に応じた。

「他人の会話を盗み聞き、割って入ってくるとは無礼ではないか」

「失礼いたしました。アルドリドの若殿ともあろう御方が、女こどものような夢物語を口にされるので驚いてしまいました」

17、8歳ほどと見える少年は、うすら笑いを浮かべて言っただけだ。

「龍は夢物語ではありません。ミーラントの龍戦争は149年前に確かに起こった歴史です」

ヴィトの静かな指摘にギンナルの息子は眉を上げた。

「身分をわきまえろ、領主の嫡男同士の会話に口をはさむな」

今度はハールが激怒する番だった。

「ヴィトは<グーダ>の後嗣であり、わたしの親友だ。そちらこそ身分をわきまえよ。ハーコンの地をゆだねてはあるが、コルの王はアルドリドであってお前たちではない。王統からとうに分かれた遠縁に過ぎぬ身で、王が礼遇する学者をあなどり、王子の友を侮辱する気か」

少年はむっと口を閉じ、嫌な目つきでハールを見据えた。ハーコンの一統を除けば、この島でハールに向かってこのような態度に出る者はいない。剣に伸びかけたハールの手をヴィトがそっと引いた。

「ふん」

ハーコンの跡継ぎは鼻で嗤うような音をたて、

「ともかく、ミーラントの悲劇以来、ドウニアにもこの島にも龍を見た者などいません。龍はデウィンがすべて退治したんですよ。嵐の恐怖で幻を見た臆病者の話を真に受けるなどくだらん、愚かな話です」

言い捨てて、ハールたちが降りてきた坂道へ向かった。その背へハールは、

「待て。ギンナルには父上が何度も呼び出しをかけているはずだ。なぜ館へ来ない」

普段ならつつしむだろう言葉を浴びせた。少年はふり返り、

「ご領主ご本人ならばともかく、嫡男とはいえ成人前のあなたに咎められる謂われはない。ましてわたしは息子です。聞きたければハーコンで父にお尋ねください」

わざとらしくおおげさなお辞儀をすると、さっさと坂を登っていった。

<グーダ>の家は不思議なもので満ちている。

筒をいくつも連ねた遠眼鏡、多くの輪が複雑に関係して太陽や月や星々の動きを示す模型、水色の液体が波打ち続ける海を備えた地図、闇にやわらかな光を放つ石。

ハールはいつものようにさまざまなものに興味を示し、ヴィトはそんなハールをやさしい目で見つめた。ハールが大人びたこどもなら、ヴィトは初めから大人だった。

「父は出かけたようですね。薬袋がありませんから、入れ違いになったのかもしれませんが」

ヴィトに声をかけられ、ドウニアの古地図から目を上げたハールは、

「さきほどは怒りに駆られ、自分で王子を名乗ったが...、なぜ、アルドリドは“王”なのだろうか

」

と問うた。

「ドウニアにはいくつもの国がある。その頭（かしら）といえるフェルスの長が“王”なのはわかるが、たとえばアデリスを併呑したイエルズも、正式な身分は“大公”に過ぎない。それなのになぜ、農民ばかりの小さな島の長が“王”とされるのか」

「126年前のイエルズとの戦いのち、時のフェルス王が夢見で定められたこととしか存じませんが...」

ヴィトは静かに、しかし強さのこもった口調で続けた。

「食べることは命の基本です。農事はそれを支えるもの。コルは小さな島ですが、ドウニアの多くの命を支えています。誇りをお持ちください」

ハールは姿勢を正し、深く頷いた。それから苦い笑いを口の端にのぼらせて、

「ところで、ハーコンに裏はないのか」

とふたたび問うた。怪訝な顔になったヴィトに向かい、

「ヴェストルは情に引かれてハーコンを割譲したという。それは真実なのか。何か危険なものでもあって、見張りのために弟を遣わした、もしくは厄介者の弟に押しつけた、などという事情はないのだろうか」

ハールは思うところを説明した。ヴィトはほのかに笑った。

「なるほど。まるでデウィンに関するアガトの説のようですね」

ヴィトは長いまつげの影を頬に落として軽く目を閉じると、100年ほど前に生きた学者が書き残した文書を暗誦し始めた。

一カレヴィをはじめ、アルフ、昨今ではオルバンやフラムといった学者たちは、デウィンを天宮の「無垢なる者」と混同しているとしか思えない。彼らは<デウィンは情け深く、醜い闘争心がない>などという。

それならばなぜ、彼らはイメア輝石に我を失ったのか。魔力と呼ぶのか呪力か、または神力、不思議の御業なのかは知らぬが、本当に闘争心のない者ならばその増幅を求めて石を争うとは思えない。まして、末期には己が魔力を保つため、他人の魔力を石に奪い吸わせたともいうではないか。そしてアルバリクのロヴァルに対する態度には、明らかな優越感がうかがえる。

実は古紀の争いにおける彼らの中には、より魔力に勝るジアルデルへの嫉視すらあったかもしれない。そこまで言わずとも、ジアルデルとの対立は彼らの事情であり、人間のことはいくつかあった「対立を象徴するもの」に過ぎないだろう。

デウィンが聖なる存在ではないことは、ミーラントの龍戦争において「塔の賢者」ジルニトルがどのような態度に終始したかを思い出すだけで充分ではあるまいか。一

ヴィトは目を開いて言葉を継いだ。

「もちろん往古のデウィンの真情は不明です。しかし、イメア輝石をめぐる『呪術者』と『賢者』の対立の時、アルフリクの子アルバリクは、伝説の王ロヴァルの参戦を喜ばなかったといわれます。人間に特別の感情があったとは思えない、とアガトは考えたようです」

「足手まといになると考えるのは、無理もないように思うが」

ハールは素直な感想を口にした。

「しかし『呪術師』の長を倒したのはロヴァルでした。デウィンは賢者ではありますが、天宮の者ならぬ身、すべてを見通すことなどできないということです。これがこの説の持つ含みです」

「人間同様、この地上に生きる者に過ぎないということだな」

ヴィトはほほえみ、

「ええ。それでもデウィンは人間よりはるかにすぐれた存在です。その彼らですら見誤るということが、わたしたちの教訓にならないでしょうか」

「なるほど。人間のすることにさほどの意味はないかも知れず、それを見抜くことはさらにむずかしいということか」

ハールが笑顔を見せたとき、扉が開いてシュラルが帰ってきた。

「これは、若君」

ハールの姿に気づくと、シュラルは軽く頭を下げた。学びの場では師としてハールに礼をさせるシュラルだが、それ以外の時には臣下の礼を忘れない。ハールも丁寧な辞儀を返した。

先にハールがタウルのもとを訪ねていたことを聞いていたらしく、シュラルは薬袋を壁に掛けながら、

「タウルのところへ参りました。新しい薬が体内の毒素を出してくれたものらしい。もう大丈夫でしょう」

簡潔に報告した。

「よかった。快方に向かっているんですね」

大きく頷くハールにほほえみかけたあと、シュラルは息子へ向かって

「若君にお話をしていたのか。何をお話申し上げた」

と問い、アガトのデウィン説と聞くなり、

「アガトの説に対し、オルバンは何と反応したか答えよ」

質問をくり出した。ヴィトは少し悪戯っぽく笑いを含み、

「フェルスの歴史を扱った書物『王家の歴史』の中の大学に関する部分で、このような忘恩の徒は少なくともフェルスにいる権利はなかろう、とあてこずっています」

さらりと答えた。シュラルが誇らかな顔になり、ハールも親友の博識ぶりと常に落ち着いた態度をうれしく思った。

「ところで、若君」

シュラルの呼びかけに、自分も試されるのかとハールは思った。しかし続く言葉を聞く前に騒々しい音を立てて玄関の扉が開き、全員の注意を引いた。

そこに立っていたのはヴィトの弟イアリだった。何があったのか、髪は乱れ、衣服は土や草まみれになってあちこちが裂け、血がにじんでいるところもある。

「何ごとだ、イアリ」

シュラルが不機嫌な声を浴びせかけた。むっとうつむいたままのイアリは返事をせず、ハールのほうへ歩いてきた。

イアリはハールの前で頭を下げ、もそもそと何かつぶやいた。

「何と言った、イアリ」

ハールが聞き返すと、イアリは少し顔を上げた。右目と頬が腫れて唇にも血がついている。その口から、

「ギンナルの息子を叩きのめしました」

腹を立てているかのような声が、驚くべき言葉を吐き出した。

「何だと？」

思わずハールは大声を出した。

イアリはまだ13歳になったばかりである。さきほど話をしたギンナルの息子は18歳ほどに見えた。ハールはもちろん、背の高いヴィトもまだ彼の背丈には届かないくらいだった。確かにイアリはがっしりした骨格で頑丈そうに見える。しかし、大人同様の相手を「叩きのめす」には役不足としか思えなかった。

「あいつは若さまを怒らせ、ぼくの兄上を馬鹿にしました。だから、思い知らせてやりました」イアリの言葉は父にも兄にも似ず、必要なことをつなげただけの無骨さだったが、それゆえに嘘ではないことがはっきりと伝わってきた。ハールは半ばあきれて、

「どうやって思い知らせたのだ」

と訊ねてみた。イアリの表情が初めて少しゆるんだ。

「木剣で足をなぎ払って、倒れたところをめった打ちにしてやりました」

「若君」

シュラルの重い声が話をさえぎった。

「お叱りいただきかねばなりません。ハーコンはご領主の御一門、しかも殿とギンナルのあいだに問題がある時に、このような愚かな真似をするとは」

「あいつは、若君と兄上に無礼な口をきいたのです」

イアリが吠えた。足をふんばって父親を見上げるイアリは、一步も引かないかまえに見えた。そして怒りに顔色を変えて息子を見下ろすシュラルも、揺らぐことのない巖のようだった。

「師よ、ギンナルもその息子も無礼なのは事実です。それにコルは武の島でもあります。少々やりすぎかもしれないが、イアリはたいしたものだ。父上とて、褒めはしても叱りはなさらぬはず」

取りなそうと声をかけてみたものの、シュラルはハールにちらりと目をやるなり、

「人には役割というものがあります。若君はむろんのこと、アルドリド王家を支えるアソル殿やアヴァラル殿は、すぐれた武人であるべきでしょう。しかし我が家は違います」

と押し返し、あらためてイア리를睨み据えると、

「学問によって王家に仕える家の者が、無用の武力自慢とは何ごとか。そのようなことをする暇があったら、せめて『天宮の樹』なりとも諳（そら）んじておれ」

冷たく言い放った。ハールははっとした。『天宮の樹』は童歌で、三歳児でも歌えるものである。イアリの顔色が灰色に変わり、切れた唇がふるえた。そしてイアリは入ってきた時よりもすさまじい音を立てて扉を叩きつけ、表へ出て行った。

ヴィトがハールへ向かって目配せした。あらぬ方へ顔を向けたまま動かないシュラルを残し、ふ

たりはそっと屋外へ出た。あたりを見回してみたが、すでにイアリの姿は見当たらなかった。

「いつもこうなのか」

ハールはぼつりと訊ねた。

「はい」

ヴィトが短く答えた。

そういえば、今まで<グーダ>の家でイアりに会ったことはほとんどない。自慢の息子ヴィトとは異なり、王子に合わせるような者ではないというシュラルの意志が働いていたのならば、イアりに気の毒なことをしたとハールは思った。

「何をお考えです、若君」

黙り込んだハールにヴィトが訊ねた。

「わたしの軽率な怒りがイアリの怒りとなり、師の怒りを招いてイア리를無用に傷つけた。わたしへの悔りを自分のものとし、怒ってくれる者がいる限り、わたしは易々と怒ってはならないのだ」

ハールが答えると、ヴィトは目を和ませて、

「わたしは、わたしのために若君がお怒りくださったのがうれしかった。お心を平らかにされるのは大事なことです、怒りが必要なこともあります。ヴェストルがスコルへの怒りを表していればハーコンはなく、今日のことありませんでした」

と言った。ハールは驚いたようにヴィトを見つめ、それからゆっくりとほほえんだ。

ハールは顔を上げてあたりを眺めた。

坂の上にはやわらかな若葉をひるがえす果樹が光を浴びている。丘の肌には草が茂り、名もない花を咲かせている。さらに道を下ると青い穂を揺らす麦畑がひろがっていて、その脇を小川がきらめきながら流れ、時に魚が跳ねて光をはじく。風はみどりと健康な土の匂いをたっぷり含み、やさしい葉ずれの音を奏でる。小鳥が澄んだ声で楽しげに鳴きかわし、虫の羽音がのどかに行き過ぎる。

黒髪をやわらかく梳きながら過ぎていく風を、ハールは胸いっぱい吸い込んだ。

「いずれわたしがこの島を治める時には、わたしを輔（たす）けてくれ」

うつくしいコルの空気が言葉を成した。

同じように晩春の景色を眺めていたヴィトははっとハールを見つめ、ゆっくりとやわらかくほほえんだ。

「わたくしでお役に立てるものならば。この命は若君とコルに捧げるものです」

ハールも笑みを返した。

「君がいてくれれば、わたしはヴェストルにならずに済むだろう」

そう言って、ハールは胸を張った。

生まれた時から、この島を治める運命だった。幼い頃から、領主の嫡男として生きてきた。それでも、今ほどコルを愛しいと思ったことはないかもしれない。数百年にわたる歴代領主の思いがハールの血の中で息吹を始めたようだった。

亡き母の瞳の色に似た空から、ハールの行く末を照らすように光がふりそそいだ。英主と讃え

られ、歴史に輝かしい名を残すハール王。ヴィトは確かにその遠い面影を見た。

CLARITY

<http://p.booklog.jp/book/94989>

著者：溪美居堂くまら

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/return1017cavydo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/94989>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/94989>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ